

# 豊橋市民の市電に対する価値認識に関する研究

豊橋技術科学大学 建築・都市システム学課程 4年 都市交通システム研究室 野口 萌衣

指導教員 松尾 幸二郎・杉木 直

## 1. はじめに

我が国の地域公共交通は、利用者減少の傾向にあり、持続可能性が課題となっている。一方で、路面電車はまちづくりの要素としてその価値が再び注目されるようになってきている。豊橋市の路面電車（市電）の現状も厳しく、今後の市電の活用や交通施策を、地域住民の市電に対する価値認識を踏まえて検討する必要がある。

そこで本研究では、市電の沿線住民と沿線外住民を対象としたアンケート調査を通じて、市電に対する価値認識の実態について分析、比較することを目的とした。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査の概要

市電に対する価値認識の実態を把握するため、アンケート調査を実施した。配布対象は市電の各電停半径 100m 程度内の 2,800 世帯と、市内の小学校区 52 校に各 60 世帯ずつ計 3120 世帯とした。調査期間は沿線住民が 2022 年 10 月 24 日~11 月 18 日、沿線外住民が 2023 年 11 月 17 日~11 月 18 日である。その結果、沿線住民の世帯回収率は 29.2%、沿線外住民の世帯回収率は 27.9%であった。

### 2.2 価値認識の評価方法

本研究では、市電に対する価値認識の実態を把握するため、仮に市電が事故や災害により廃止になった場合を想定してもらい、困ることについて、表 1 に示す 4 つの観点について、各回答者に対して一対比

表 1 4 つの観点と対応する価値項目

困ることについて	価値項目
自分にとっての移動手段がなくなること	直接的利用価値 (オプション価値)
来訪者や公共交通が必要な人のための移動手段がなくなること	代位価値 (間接的利用価値)
将来世代が利用できなくなること	遺贈価値
豊橋市のシンボルや資産としての市電がなくなること	シンボル価値

較 (4C<sub>2</sub>=6 通り) の質問を行った。分析においては、シェッフェの手法を、交互作用項を用いて非集計に拡張した統計モデル分析を行った。

## 3. 分析結果

### 3.1 公的財源を用いてももう 100 年続けるか

設問に対する結果を図 1 に示す。市電の利用頻度の少ない沿線外住民からも“続いた方がよい”と回答が多くみられた。

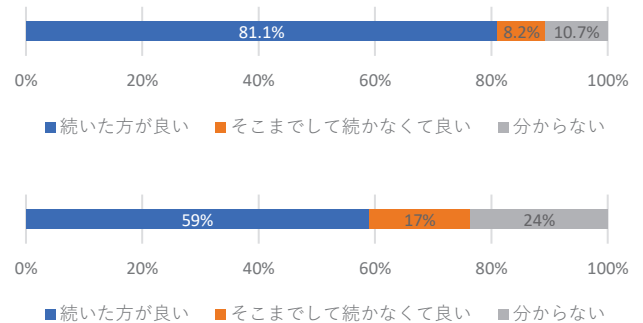


図 1 もう 100 年続けるか (上:沿線住民/下:沿線外住民)

### 3.2 沿線住民の価値認識

モデル分析の結果をもとに、各価値項目の認識の重要度の差についてグラフに示したものを図 2 に示す。沿線住民、沿線外住民ともに直接的利用価値の認識が最も高くなっている。また、沿線外住民は沿線住民に比べ、相対的に代位価値、遺贈価値、シンボル価値は高くなっている。

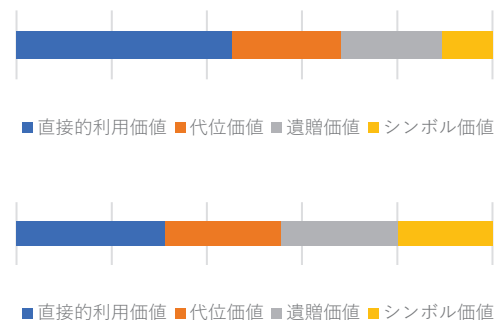


図 2 各価値項目重要度パラメータの相対比較 (上:沿線住民 下:沿線外住民)

## 4. まとめ

市電が続いてほしいと思う市民は多く、市電に対する価値認識については、沿線住民と沿線外住民で構造に違いがみられた。研究結果が、今後の地域公共交通のあり方をみんなで考えるきっかけの 1 つになってくれたらいいと思う。